

Title	各地よりのたより (時と暦の特輯)
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1941), 21(240): 199-200
Issue Date	1941-05-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/168197">http://hdl.handle.net/2433/168197</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 各地よりのたより

### ホノルルより彗星だより

拜啓 陳者去る二月5日夕、7時より8時迄の間に、シリタス星座中ミラ星の東南、約8度位の所に彗星を見ました。光度は至つて弱く、私の目にて辛うじて見得る程度で、尾も多少は引いて居りましたが、先づ、視力の弱き人には、光度薄弱の、通常五等星位に見ゆるのみでした。出現の場所と時間の工合が、私の豫期して居つた所とは、可なりの相違であります。

天界 236 號に御掲載ありし1910年出現のハリ彗星は私も見た一人です。又、1910年一月27日、1910 a 彗星は、突然、夕6時半より7時半迄出現、日没直後、西方の地平線上20度前後の所に居り、尾の長さは、矢張り、20度以上で、光度も強く、誠に美麗な彗星でありました。

同年四月27日、當市のカイムキ天文臺に宿り込み、夜中午前3時起床、布哇大學のドナホ1教授と共に觀測しました。午前3時40分、ハリ彗星は東方海岸コイコイヘッド岬（米大陸より來布の折、最初に見る岬にて、其より船はワイキキ岬を廻り、ホノルルへ入港するのです）の山上より出現の時には、魚星座中に居りました。又、金星も當時は西方僅かの距離に居ました。同五月19日、地球に接觸の折は、當ホノルル市にては午後5時前後でありし爲め、其間、黒煤のグラスを携へて、屋上に4時より6時迄居り、太陽及其近傍を注意して見ましたが、何等の異變も無かつたやうです。其夜、曉明近くには、彗星は最高度に達し、尾は東方より西方迄、一面にサ1チライトの如く天空を掩ふた其の壯觀は、私の生涯忘るゝ事の出來無い異狀でした。

其の當時、日本より受取りし或る新聞の紙上に掲載のカットの説明があまり可笑かりし爲め、未だに私の手元に保存してあります。其句に曰く「千日前のハ1レ1觀測」

大阪の千日前の或る四ツ角で、水を入れた盥の蓋に、ガラス戸を二枚重ねて『サ1皆のぞいて見なはれ、お日さんの隣りの方に、白い丸いのが二つおまつしやろ。一つが彗星さんで、一つが日天様の御煩ひの神さんだす……エライもんだすナ1』とは、婆さん考へたもの!!

1941年二月7日

在ホノルル 熊田儀助

### 日時計の寫眞にそへて

今夏先生へも拜眉仕りし當地第二小學校大井校長、豫てより日時計設置の希

望を洩し居られ候ひしも、今回當地篤志の婦人より寄贈する事と相成、上旬同校々庭に設置せられ候に付寫眞同封仕候。尙同校長は太陽高度計、方位盤等も同時にとの事にて、高度計は日時計の後方(?)に少し丈長の棒を添へ、其下より細長き板を出して夏至、春秋分、冬至等の南中に相當する目盛を入れて、左右の板は10日置の時差表、南側の板は小學生徒に判る様な日時計時刻算式、寄贈者氏名等を刻し周圍は方位盤とし方位、角度、十二支等を記し、其他寫眞にて大略御覽の通りにて、如此形式も如何かと存候も同校長の希望も有之事右様に纏めた次第に候。尙日時計据付を當地經度と合せ候様作圖の筈に候ひしも現在としては日時計も時計としての使命より理科教育的と考ふ事が至當と存じ約13分を標準時との差を引く事により經度の差を知らしむる様に致候。右御報告如斯に候 拜具

15年十一月25日

清水 眞一

### 理事津久井修氏急逝さる

拜復 春暖の候、御一同様、益々御清榮の段、奉賀候。陳者、兄修儀、昨年六月頃より靜養致居り、一時は相當回復の色も見え候へ共、本年一月に入り、衰弱加はり、一月25日腹痛を伴ひ、翌26日危篤に陥り、同日午後1時遂に永眠仕候。早速御通知申すべく筈の處、取紛れ延引仕候。茲に、謹みて、生前の御厚誼を拜謝し、此段御報告申上候 敬具

三月21日

津久井 弘

### 編輯室より

六月10日の“時の記念日”に因んでこの號も“時”の特輯號としたこと例年の通り。この號には特に二つの興味ある文がある。一つはファレット氏の醫學と時計と測時術の文であり、他の一つはエイトケン博士の火星世界に於ける時刻の文である。ファレット氏の文は、うつかり天文學徒に忘れられてゐる逸話に富んだもので、教へられるところが多い。エイトケン氏の文は、氏自身も實際往つて見たことのない火星世界に、若し人類のやうな高等な生物の社會があるものならば、其の社會で用ゐられてゐる“時”とは、こんなものだらう! といふ想像畫である。天文學者に小説を書かせて見ると、こうした奇抜な世界を描くだけの材料を、平常からチャンと有つてゐるのである。誰か、木星や土星世界の時を書いて見る人は無いか? ▲編輯室には野尻氏、竹内博士、山本會長、伊達氏、渡邊氏、村上氏等の原稿が山積しつゝある。それに、又、九月の日食のこと、火星のことなど、時機におくれないやうに載せねばならない。中々多事である。▲前々238號の口繪のカニガム彗星の右方は九月21日の誤り。又、同號第119頁の坂上氏は Saka-no-ue と讀む由につき、訂正する。